

# 「地域への愛着」を育む生活科・町探検の研究

—表現活動の工夫を通して—

杉 桃華

(愛知教育大学大学院 教育学研究科)

Study of exploration on Living Environmental Studies to get “attachment to the region”

・ Focusing on expressive activities ・

Momoka SUGI

(Graduate Student, Aichi University of Education)

## I. はじめに

近年、生活科において「地域への愛着」は非常に重要なキーワードである。平成 29 年度の学習指導要領解説、生活科編では学年目標（１）の中に、「学校、家庭及び地域の生活に関わることを通して、自分と身近な人々、社会及び自然との関わりについて考えることができ、それらのよさやすばらしさ、自分との関わりに気づき、地域に愛着をもち自然を大切にしたり、集団や社会の一員として安全で適切な行動をしたりするようにする。」<sup>1)</sup>という記述がある。同様に内容（３）の地域と生活においても、「地域に関わる活動を通して、地域の場所やそこで生活したり働いたりしている人々について考えることができ、自分たちの生活は様々な人や場所と関わっていることが分かり、それらに親しみや愛着をもち、適切に接したり安全に生活したりしようとする。」<sup>2)</sup>という記述がみられる。これらの記述にはいずれも、「親しみ」や「愛着」という地域や人々に関する言葉が明言されている。

しかし中央教育審議会（1990）が、「現実には、地域社会での活動を通しての子供た

ちの生活体験や自然体験は著しく不足していると言われ、また、都市化や過疎化の進行、地域における人間関係の希薄化、モラルの低下などから、地域社会の教育力は低下していると言われている。」<sup>3)</sup>と述べているように地域社会と子どもたちの関係性は希薄化しつつある。また、同じく中教審(2004)は「少子化、核家族化が進行し、子ども同士が集団で遊びに熱中し、時には葛藤しながら、互いに影響しあって活動する機会が減少するなど、様々な体験の機会が失われている。(中略)さらに、人間関係の希薄化等により、地域社会の大人が地域の子どもの育ちに関心を払わず、積極的にかかわろうとしない、または、かかわりたくてもかかわり方を知らないという傾向が見られる。」<sup>4)</sup>と述べており、子どものみに関わらず地域全体をみても関係性が希薄化傾向にあると捉えられる。また、子どもたちにおける体験活動の重要性も伺える。

これらを踏まえ、生活科という地域と深く関わる機会がある教科を通して、子どもたちと地域を繋ぎ、「地域への愛着」を育んでいく必要があると思われる。そして、その

中でも子どもたちが実際に地域に出かけ、地域の人と深く関わることができる「町探検」という体験活動は非常に重要な意義をもつのではないかと考察する。

ここで、「町探検」を通して「地域への愛着」について考察を行った加藤亜美を取り上げる。加藤（2010）は、「町探検」を通して地域への愛着を育むプロセスのはじめに『地域を知る』という段階を位置づけ、『『地域を知る』を付け加えたのは、『地域に関心をもつ』ためには、『地域を知る』ことが前提ではないかと考えたためである。』<sup>5)</sup>と述べている。ここから、地域への「親しみ」や「愛着」を育むためには前段階として地域を「知る」ことが重要であると捉える。

そして、平成 29 年度学習指導要領解説、生活科編では、「自分との関わりに気付くとは、自分自身と対象との結び付きに意識を向け、自分と対象との関わりが具体的に見えてくることである。こうした気付きによって、児童は幸せや喜びを感じたり、それらを誇りに思ったり、心地よく生活しやすいと感じたりして、次なる行為につながっていくものと考えられる。それが、地域に愛着をもち自然を大切にしたり、集団や社会の一員として安全で適切な行動をしたりすることにつながる。」<sup>6)</sup>と述べられている。ここからは、「地域への愛着」を育むためには地域と自分との関わりに気づくことが重要だと捉える。

この 2 点より地域への「親しみ」や「愛着」という情緒的な要素を育むためには、「知る」や「気づく」といった知覚的な要素が非常に重要であると示唆される。これらに代表される自らの「気づき」を自分で認識したり、他者と共有したりするために「表現

活動」は有効であると考ええる。

また、同じく生活科指導要領解説では「親しみ」や「愛着」について、「地域の人々や場所のよさに気付くとともに、それらを大切にする気持ちや地域に積極的に関わろうとする気持ちを一層強くもつことである。」<sup>7)</sup>としている。気持ちは目に見えないものであり、育っている姿を捉えることが難しい。しかし、この目に見えない情緒的な側面を少しでも表すことができる方法の一つが「表現活動」であると考ええる。

しかし、町探検の「表現活動」に関して詳細に研究されている論文はまだ少ない。そこで、加藤の「地域への愛着」について述べた 2 つの論文をはじめとする先行研究をもとに、「町探検」における「表現活動」の重要性と可能性について研究を進めたいと考えた。

研究の方法としては、まず「地域への愛着」について先行研究をもとに定義する。次に、それらはどのように育むことができるのかについて述べられた過程についてさらなる考察を行い、「表現方法」はどのような効果をもたらすのか考察を行う。最後に今年度筆者が子どもたちに行った表現方法の工夫を伴う実践を取り上げ、子どもたちにどのような変化が表れたのか分析を行う。これらの研究を通して、町探検単元における「表現方法」の工夫がもたらす「地域への愛着」についてより明らかにしていきたい。

## Ⅱ.研究内容

### 1. 「地域への愛着」の定義

#### （1）大枠から捉えた「地域への愛着」

まず、「地域への愛着」を育む町探検について考える前に、「地域への愛着」とはどのようなものを指すのだろうか。

教育以外の研究分野では「地域への愛着」について次のように示されている。看護分野において大森（2014）は、「日常生活圏における他者との共有経験によって形成され、社会的状況との相互作用を通じて変化する、地域に対する支持的意識であり、地域の未来を志向する心構えである」<sup>8)</sup>と定義している。また、環境心理学において Hidalgo and Hernandez（2001）<sup>9)</sup>は地域に対する愛着を「人と地域とを結ぶ情緒的な絆」としており、多くの研究においてこの定義が用いられている。これらの定義からは、「地域への愛着」について、地域との関わりによって構築される人々の地域に対する強い思いや心情面を表していることが伺える。

そして、教育分野においても「地域への愛着」について様々な見解が述べられている。市内の中学生が郷土への理解を深めることを目指した「かすみがうら子どもミライ学習」<sup>10)</sup>は「郷土を愛し誇りに思う心を育み、未来のまちづくりを考えることができる人材を育成すること」を目的としている。

小学校高学年の総合的な学習の時間で実践した大淵（2011）は、『「地域への愛着」とは地域のよさと自分とのつながりについての認識と、それによって生まれるかわりたいたいと願う心情である。』<sup>11)</sup>としている。

小学校中学年での活動を取り上げた柿崎（2023）<sup>12)</sup>は、チラシ作成の実践について、子どもから課題が成立した要因の一つに3年次に地域の良さをたくさん実感したことや、地域の人々との絆が深く、地域への貢献の気持ちが養われていたことを挙げている。

このように「地域への愛着」には発達段階に関わらず、地域や地域に住む人々と関わる体験や経験から得た地域に対する強い思

いが重要であると捉える。だからこそ、筆者は「地域への愛着」について Hidalgo and Hernandez の「人と地域とを結ぶ情緒的な絆」という定義を大枠とし、地域との関わりや地域に住む人々とのつながりが不可欠であり、関わり続けることでより深まっていくものであると定める。

## （2）低学年・町探検での「地域への愛着」

そして、低学年ならではの生活科の視点から「地域への愛着」について捉える。松井は、「児童は地域への働きかけを積み重ねることで、地域の人々や場所に慣れ親しむようになる。そして、地域の人々や場所から離れがたく感じるようになることで、地域への親しみや愛着が育まれていくと考える。」<sup>13)</sup>と述べている。このように、生活科における「地域への愛着」には実際に地域に出かけ、地域の人々と関わりながら進められる「町探検」の存在が重要であることが改めて示唆されている。そして「町探検」を中心に「地域への愛着」について述べた加藤（2010）は様々な文献を踏まえ、『「愛着」というものは、離れがたい思いや好きという気持ちだけではなく、児童の生活に根ざしたものでなくてはならないと考える。したがって、低学年がもてる『「地域への愛着」の定義を、児童の日常生活においても継続されていくような、『生活していく中で、【町探検】でもった地域に対しての【いいな】や【好き】という気持ちを思い出し、持ち続けながらかわること』とした。』<sup>14)</sup>と述べている。ここから、低学年という発達段階において「地域への愛着」を育むためには「町探検」という体を通して得た「いいな」や「好き」といった情緒的側面が短期的なものになるのではなく、地域に対する想いをもち

続けながら積極的に関わっていくことが、長期的な思いが重要なのではないかと考察する。

一方で、看護分野の大森らが示した定義やかすみがうら市の中学校での実践には「地域への愛着」というものに「未来志向」的な意義が含まれるものではないかと捉える。加えて、小学校における総合的な学習の時間での実践には、地域との関わりの中で「地域貢献」の気持ちが育まれるものであると捉える。このように、「地域への愛着」には発達段階によって違いがみられることが示唆される。

以上の考察から、「地域への愛着」には低学年での「いいな」や「好き」といった地域に対する好意的な思いを持ち続けるといった愛着の形から、より学年が上がるにつれ自ら関わり、支えるという側面が表れるということが明らかになった。

そして、低学年においては「町探検」という地域と関わる体験が重要であり、そこから生まれた地域に対する思いを持ち続け、関わり続けることが「地域への愛着」といえるのではないかと考える。そのために、教師は町探検活動を工夫し、子どもたちに芽生えた情緒的側面を表出させていく必要があると考える。

## 2. 町探検において「地域への愛着」を高めていくために

### (1) 「地域への愛着」が高まるプロセス

生活科の町探検において子どもたちに「地域への愛着」を育てていくにはどのようにしていけばよいのだろうか。加藤は「地域への愛着」の定義とその愛着が深まる過程を次のように示している。<sup>15)</sup>

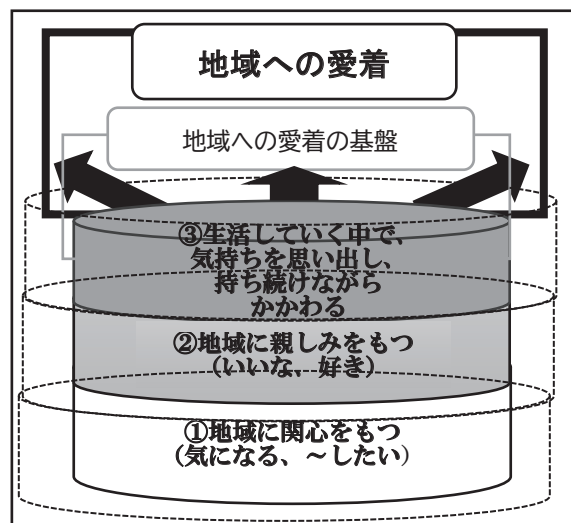


図1 「地域への愛着」の定義(加藤)

加藤はこのように図式化したうえで、「地域への愛着」をもつために、地域について繰り返しかかわり、「地域に関心をもつ」→「地域に親しみをもつ」→「地域で生活していく中で、気持ちを思い出し、持ち続けながらかわる」ことが低学年での『地域への愛着』という流れになるという考えを示している。

また山本・加納(2016)は、加藤の考察を踏まえ、地域への愛着が深まる過程を次のようなプロセスを提示している。

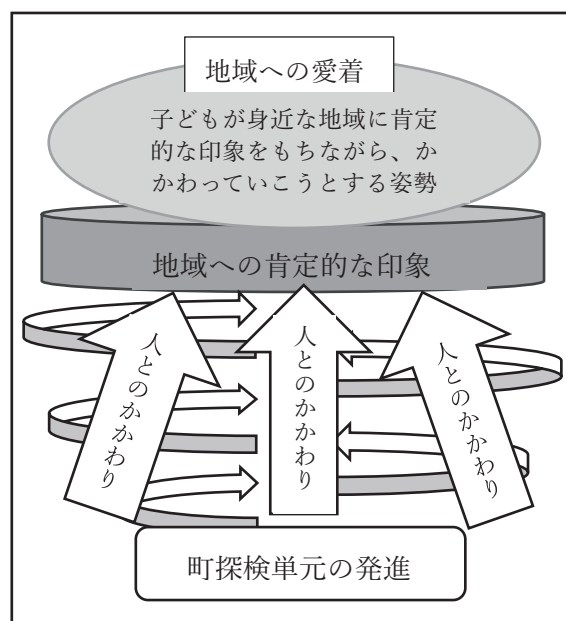


図2 「地域への愛着」形成のプロセス(山本他)



山本は生活科における「地域への愛着」について「子どもが身近な地域に肯定的な印象をもちながら、かかわっていかうとする姿勢」と定義し、『『地域への愛着』形成を目指した『町探検』は単元を通して地域にくり返しのかかわる活動、特に地域の人とかかわる活動によってその質を高めていくと考えられる。』<sup>16)</sup>と述べている。

両者のプロセスを比較すると「地域への愛着」は地域に対する思いを持ち続け、関わり続けるものであるとしていることに加え、最初から深い愛着を抱くのではなく、体験や交流を繰り返すことで段階的に愛着が深まるものであると捉えられる。しかし、加藤は「関心を持つ」という部分を土台にしているのに対し、山本は人とかかわりによって質が高まると述べており、着眼点はそれぞれ異なる。だが、この二つのプロセスは相反するものではなく組み合わせられるものであると考える。

## (2) プロセスにおける表現活動の重要性

加藤のプロセスでは、まず子どもたちの中にある興味や関心といった気づきを言語化し、アウトプットさせていくことが重要ではないだろうか。また、親しみや愛着という目には見えない思いや願いを表出させていくことで自分自身が地域に対する思いを深めていることを、自覚させていくことが大切なのではないかと考える。そして、それら2つの段階双方において表現活動が大きな役割を果たすのではないかと考察する。

また、町探検において人の存在は非常に重要である。人との出会いにより、地域の新たな良さに気づき、疑問や興味をもち、さらには地域の人たちの良さにも気づくことができる。そして、地域と関わり続けるという

ことは地域の人々と関わり続けることでもある。だからこそ、山本が示すように町探検において人とかかわりは重要な要素であると思われる。その上で、町探検において人と人を繋ぐためにも「表現活動」は有効に働くのではないかと考える。人との出会いから生まれた気づきなどを表し、子ども同士の思いを共有させる。そして、お世話になった人やこれからも関わり続けていきたい人へ思いを伝える。これらそれぞれの場面において表現活動を取り入れることができ、子どもの思いを表すことができるのではないだろうか。

これらを踏まえ、筆者は町探検における表現活動の意義を次の三点にまとめる。

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"><li>① 町探検を通した気づき、地域に対して芽生えた興味・関心を表す</li><li>② 地域に対する思いや願いといった目に見えない肯定的な思いを表す</li><li>③ 地域や地域の人々に対する思いを共有したり、他者に伝えたりする</li></ul> |
|---|

もちろん、表現活動の工夫のみで愛着が深まるものではない。しかし、プロセスの各段階そして、町探検活動のなかで子どもたちの思いを表出させるという意味で表現活動は有効に働くものであると思われる。

そして、次章では具体的に表現方法のどのような工夫ができるのか考察を進める。

## 3. 地域への愛着が高まる表現活動

### (1) 学習指導要領からの考察

これまで町探検における表現活動の有効性について示してきた。では具体的に表現活動とはどのようなものを指すのだろうか。生活科学習指導要領では、『『表現する』とは、気付いたことや考えたこと、楽しかった

ことなどについて、言葉、絵、動作、劇化などの多様な方法によって、他者と伝え合ったり、振り返ったりすることである。一人一人の気づきなどが表現されることによって確かに、交流することで共有され、そのことをきっかけとして新たな気づきが生まれたり、様々な気づきが関連付けられたりする。」<sup>17)</sup>と述べられている。

したがって、より一人一人の思いや願いをありのままに表すことができ、それぞれの違いが生まれるという点が生活科における表現活動の良さであると考ええる。また、一人一人による表現が違うからこそ、他人と比べることや自分の表現を見つめ直すことができる。そしてそれぞれのものを組み合わせたり、協力したりしてより大きな枠組みでの表現活動を行うこともできる。このように、一人一人の「個の表現活動」と一緒になって考えたり、取り組んだりする「協働的な表現活動」の二点が効果的であると考ええる。

## （２）体験と表現の連動

しかし、繰り返しているようにただ表現活動を重視していくだけでは「地域への愛着」は育むことはできない。そもそも、表現するもの、子どもたちが表現したいと思うものが無ければ、豊かな表現活動には繋がらないからである。

柿崎（2013）<sup>18)</sup>はヴィゴツキーの意見を踏まえ「体験」があり「言語活動」があると述べているように、表現活動にはその前に豊かな体験活動が必要であると捉える。また、永野（2020）は、町探検における体験活動と表現活動に注目した実践を行った上で、「対象に関わる活動とその活動を通して気付いたことを表現する活動とを子どもの

思いや願いに応じながら往還させることは、主体的・対話的な学びを生み出し、気づきの質が高まる深い学びを実現することに有効である。」<sup>19)</sup>と述べており、ここからも体験と表現を連動させながら、双方を意識していくことが不可欠であることが示唆される。

このように、生活科において「地域への愛着」を育んでいくには表現活動のみに注視するのではなく、子どもの思いや願いを生み出し、「表現したい」と思えるような体験活動及び「町探検」が重要であり、体験を通して得たそれぞれの思いがしっかり表れるような表現活動の工夫の両方を意識していくことが必要であると思われる。

## （３）町探検における表現活動の工夫

ここまで、生活科における表現活動について考察を進めたが、さらに「町探検」に焦点を当て考察を行う。加納（2010）は平成20年度に実施された前畑教諭の実践のポイントの一つに人とかかわりを重視した交流活動を挙げている。<sup>20)</sup>豊かな交流活動を行うためには、子どもそれぞれの意見を出合わせたり、一人一人が伝えたい思いを明確にしたりしていく必要がある。また、同実践では自分が一番伝えたいことを、一番伝えたい方法で、伝えたい人に発表する学習が展開されている。その表現方法は多岐に渡り、子どもたちが自ら話し合って決定したものである。

このように、「町探検」における表現活動では自ら選択した方法で表現できること、また、それぞれの意見を交流させ、自らの良さ、友達の良さに気づかせること、2点が有効なのではないかと捉える。そして、この2つの視点は前項までで述べた「個の表現活動」と「協働的な表現活動」と共通した視点

であると思われる。これに体験の重要性も加え、「町探検」における表現方法のポイントとして次の三点を挙げる。

- ① 選択性(自分の思いを自分が選んだ方法で思うがままに表す)
- ② 共有性(他者に自分の意見を伝える、他者と協力して一つのものを創り上げる)
- ③ 連動性(体験が楽しくなるような工夫、体験と関連した表現活動の形)

これらを踏まえ、次章では今年度実践した生活科実践について振り返りつつ、考察を行う。

#### 4. 筆者の実践から

今年度、実習として関わらせていただいている学校の1, 2年生において表現方法の工夫を伴う三つの実践を行った。「町探検」とは異なる実践ではあるが、それぞれ共通する要素をもつ実践である。先ほど示した三点の工夫に沿って考察を進める。

##### (1) 選択性を重視したワークシート

M小学校の2年生(男子9人女子16人計25人)で、給食センター見学の授業を2コマ行った。筆者が担当したのは、振り返りの部分で、見学の際と振り返りの際に使用するワークシートの作成も行った。

これまでいくつかの授業に関わらせていただく中で、振り返りがなかなか書けない子や、「文章が全く浮かばない」と話す児童がみられた。そのため、ワークシートにはあえて架線を引かず、絵でも文でも自由に表現してよいと伝えた。比較できるように工夫した。

その結果、文章を書くことを苦手としている児童は枠いっぱい使って絵で思いを表している姿や文章で細かく表現する児童の

姿がみられた。A児は体験を通して、給食センターで働く人々の凄さにふれ、給食に対する愛着を深めている姿がみられる。(図3) また、B児はワークシートの裏面も全面使いながら、絵と文を組み合わせて高まった自らの思いをめいっぱい表している姿がみられた。(図4)

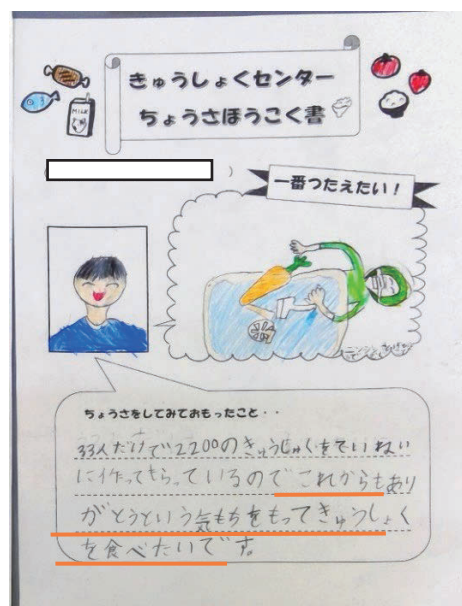


図3 A児の振り返りシート



図4 B児の振り返りシート



このように、子どもの思いを引き出すためには、自由な表現ができるよう工夫することが有効であることが示唆される。だからこそ、「選択性」のある表現方法は生活科において有効にはたらくのではないかと思われる。特に町探検は、表現したい対象が多く、地図などの空間認識を生かすような手法もあるため、より幅広く選択する可能性を秘めていると思われる。

## （２）共有性を重視した振り返り活動

同じ学校の１年生（男子１２人女子７人計１９人）で、校庭での「冬見つけ」の実践を行った。「冬のおたからをさがそう」というテーマを掲げ、校庭で冬の良さを色々見つけるとともに、一人一人のお気に入りのものを見つけることも目的とした。その活動のまとめとして、校庭のおたからマップの作成を行った。完成したマップが以下のものである。（図５）

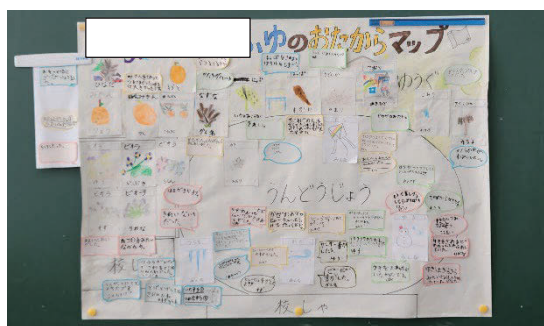


図５ 校庭の冬みつけで作成したマップ

作成に取り組んだ子どもたちは、見つけた物が同じであった子ども同士で、それぞれが見つけたポイントや良さについて楽しそうに話し合う姿がみられた。「みかん」や「ビオラ」という共通のものを取り上げた子どもたちだが、子どもたちによってかなり違いが表れる絵や紹介が生まれていた。また、校庭で感じた「風」の特徴について、ふきだしに様子を書いてもらったのだが、

「びゅーびゅー」や「ザーザー」など様々な表現がみられ、それぞれの感じ方の違いを比較することができた。

そして、活動を終えた子どもたちの振り返りには「こおりをさわりたいよ」と他の友達が見つけた者に対して興味をもつ様子や、「つぎはなつのマップをつくりたいです。」と今回のマップ作りを楽しみ、次の活動に意欲的になっている姿がみられた。

このように、他者とともに行う表現活動には、友達との表現の違いに気づく良さや、共に作り上げることの喜びや楽しさがあることが伺える。だからこそ、表現活動には交流の場面を取り入れることが有効であるとともに、「共有性」を意識した表現活動には思いを高める一面があると考えられる。町探検では、行動範囲も広くそれぞれが興味を抱く対象も様々であるため、より他者との比較がしやすいのではないかと考える。

## （３）連動性を意識した体験と表現

子どもたちの思いを引き出すための体験として、「あきみつけビンゴ」を行った。手書きのビンゴカードを用意し、校区内の公園で実践を行った。項目には五感を意識した内容を取り入れた。（図６）



図６ あきみつけビンゴカード



子どもたちは友達との会話を楽しみつつ、見つけた物を比べながらビンゴに意欲的に取り組む姿がみられた。とっておきのものには赤い落ち葉や大きなどんぐりなど、それぞれの個性が表れていた。その後の振り返りシートには「秋見つけ」を楽しんだ子どもの思いが表れていた。

しかし、「冬見つけ」を校庭で行った際、秋とのつながりを意識し、再び五感を意識したワークシートを作成し、体験活動を構成したのだが、思った成果が表れなかった。ミッション1として五感を意識した内容を入れたのだが、見つけるものを具体的に指示していなかったこともあり、活動中もどうしてよいのか分からず戸惑っている児童の姿もみられた。また、ミッションの内容が難しかったのかワークシートにかなり空欄がみられた。C 児のワークシートでも上の記述からは、思いを高めている姿は見とることができない（図7）

やってみよう	どんなようすだったかな	マーク
キラキラをさがそう!		
かぜのあとをきこう!	ふーふー	
おちばをさがそう!	おちばがいます。	☆
においをかごう!		

図7 C 児の冬見つけのワークシート

このように、体験活動が表現活動と上手く連動させることができれば、子どもたちの素直な気持ちを見とることはできない。また、子どもたちが没頭できるような体験でなければ、生き生きとした思いは表れない。子どもたちが全力で体験活動を楽しめるからこそ個性あふれる表現が生まれるのだと考える。だからこそ、体験と表現を連

動させそれぞれを意識しながら進めていくことが大切だと思われる。町体験では、人との関わりや地域との関わりが非常に重要である。また、繰り返し地域と関わる重要性も強調されている。だからこそ、まずは町探検の内容を充実させ、表現活動と関連づけながら進めていく必要があると考える。

### III おわりに

ここまで、先行研究と筆者の実践を踏まえ、生活科・町探検における表現活動の意義や工夫する点について考察を行った。「地域への愛着」の定義を比べた上で、町探検で育まれる愛着とは何か、そしてどのように育んでいくことができるのかを整理し、「町探検における表現活動の意義」と「町探検における表現活動の工夫点」を示すことができた点はこの研究の成果と言える。

しかし、筆者の実践は町探検単位において実施したものではなく、町探検で実際どのような子どもたちの反応が見られるのかは明らかになっていないことが課題である。そのため、今後の実践や研究において、今回示したものをを用いて町探検実践を行い、考察を進める。

また、子どもたちの豊かな表現を引き出すためには体験活動が充実している必要が改めて明らかとなった。体験と表現の連動性も今後の課題と言えるだろう。そのため、子どもたちの実態把握に努め、発達段階に則した体験活動、町探検の構成を工夫し実施していきたい。

### 参考・引用文献

- 1) 文部科学省 (2017 年)「小学校学習指導要領 (平成 29 年度告示) 生活編」 p.19
- 2) 上掲書 1) p.33
- 3) 文部省 (1996 年)「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について 中央教育審議会 第一次答申」第 3 章 これからの地域社会における教育の在り方  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chuuo/toushin/960701j.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuo/toushin/960701j.htm)
- 4) 文部科学省 (2004)「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について (中間報告) (案)」第 4 節 子どもの育ちの現状と背景
- 5) 加藤亜美 (2010)「生活科における『地域への愛着』の基盤を築くための一考察—主に名古屋市での実態調査を通して—」
- 6) 前掲書 1) p.12
- 7) 前掲書 1) p.35
- 8) 大森純子他 (2014)「公衆衛生看護のための“地域への愛着”の概念分析」日本公衆衛生看護学会誌 JJPHN Vol.3 No.1 pp.40-48
- 9) Hidalgo, M.C. and Hernandez, B.  
(2001) Place Attachment: Conceptual and Empirical Questions.  
Journal of Environmental Psychology, 21 pp.273-281.
- 10) かすみがうら市 (2017)「かすみがうら子どもミライ学習実施計画書」p.1
- 11) 大淵裕三子 (2011)「地域への愛着を深める子どもを育てる総合的な学習の時間」福岡県教育センター 長期研修 報告書 pp.85-90
- 12) 柿崎和子 (2023)「『生成の体験』による生活科及び総合的学習の豊かな学び (Ⅱ) —地域や人々に関わる実践の考察を通して—」愛知教育大学教職キャリアセンター紀要 第 8 号 pp.129-138
- 13) 松井砂香江 (2013)「地域への親しみや愛着を育む生活科指導の工夫—多様な評価資料を活用し、視点を明確にした見取りを通して—」広島県教育センター 平成 25 年度教員長期研修 (後期)  
[https://www.hiroshimac.ed.jp/pdf/research/chouken/h25\\_kouki/kou12.pdf](https://www.hiroshimac.ed.jp/pdf/research/chouken/h25_kouki/kou12.pdf)
- 14) 加藤亜美 (2010)「『地域への愛着』の基盤を築く生活科学習—都市部における第 2 学年『秋の町探検』の授業実践を通して—」愛知教育大学 生活科・総合的学習研究 第 8 巻 pp.87-96
- 15) 上掲書 14)
- 16) 山本銀兵、加納誠司 (2016)「『地域への愛着』形成過程に関する一考察—『町探検』の実践分析を通して—」愛知教育大学 教職キャリアセンター紀要 第 1 巻 pp.17-25
- 17) 前掲書 1) p.15
- 18) 柿崎和子 (2013)「体験活動」と「言語活動」の連動による学び —「種から植物を育てる活動」を振り返る「物語作り」の学びの可能性—愛知教育大学 生活科・総合的学習研究 第 11 巻 pp. 159-167
- 19) 永野優希 (2020)「体験と表現で生まれる主体的・対話的で深い学び: 第 2 学年『ふぞくたんけんたい しゅっぱつ』についての考察」鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 第 29 巻 pp.228-237
- 20) 加納誠司、前畑朱里 (2010)「自分の学区に愛着を感じるような町探検」『子どもが生きる授業が生きる 新しい生活科がめざす道』大日本図書株式会社 pp.106-110